パネルディスカッション

パネラー　石川浩徳（日蓮宗現代宗教研究所顧問）
影山教俊（日蓮宗現代宗教研究所嘱託）
早坂鳳城（日蓮宗現代宗教研究所嘱託）

アドバイザー　伊藤立教（日蓮宗現代宗教研究所主任）

コーディネーター　灘上智生（日蓮宗現代宗教研究所嘱託）

灘上師　ただいまから、パネルディスカッションを始めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

このパネルディスカッションは、午前中に行われました日蓮宗現代宗教研究所伊藤立教主任からの基調報告の内容を受けまして行います。まず、趣旨を再確認させていただきます。立正安国を宗是とする日蓮宗が五十年前に取り組んだ世界立正平和運動は、先の戦争に対する反省から始まった宗門運動ですが、現実には休止状態にあります。戦時下宗門の総括を、基調報告を元に、今日の視点から行います。また、殺すな、殺させるな、殺すことを許すな、の仏戒を持つ仏教徒が、平和と戦争に対してどう行動するかを、宗内外の種々の意見を代弁する形でパネルディスカッションを行います。参加者の皆様にもパネルディスカッション中に質問を致しますので、アナライザーを通してアンケートを集計させていただきたいと思っております。

それでは、パネラーの紹介をさせていただきたいと思います。日蓮宗現代宗教研究所顧問、本念寺住職、石川浩徳上人です。続きまして、日蓮宗現代宗教研究所嘱託、釈迦寺住職、影山教俊上人です。続きまして、日蓮宗現代宗教

研究所嘱託、順正寺住職、早坂鳳城上人です。そして午前中の基調報告者でした伊藤立教主任にアドバイザーでご参加いただきます。本覚寺住職、伊藤立教上人でございます、よろしくお願い致します。この度、コーディネーターを務めさせていただきます、私、日蓮宗現代宗教研究所嘱託、善行寺修徒の灘上智生でございます、どうぞよろしくお願い致します。それでは、午前中の伊藤主任の基調報告を受けまして、各パネラーの皆様から説明並びにご意見をいただきたいと思います。まず始めに、影山上人におかれましては、第二分科会で「宗制から見た戦前戦後の日蓮宗」というテーマで発題をされる予定でございますが、先程の伊藤主任からの基調報告の内容で、戦時下の日蓮宗を考えるに当たりまして、どこがポイントとなるかということをお話いただきたいと思います。

影山師　難しく話をすると長くなりますので、かいつまんで申し上げたいと思います。先程、総長さんがこの中央教研の論題を見まして、宗教団体としては大変重い問題だと、宗教教団としては大変重い問題を扱うなあと仰られたと思うんですね。ところが、この宗教団体の考え方ですね、例えばその、戦時下の日蓮宗は、場合によると、宗教団体、宗教組織ではなかったんではないかと。行政機関としては組織があったけれども、宗教団体としては機能していなかったんじゃないかということがこの歴史を見ていくと分かるんです。先程、伊藤主任さんが、資料を呈示してお話したと思うんですが、現在我々が日蓮宗と呼んでいる宗教教団は、明治五年から日蓮宗を名乗るわけですが、その時、簡単に言えば、幕藩体制を明治維新でひっくり返したわけで、その時に、幕藩体制を支えていた宗教教団、仏教教団組織が非常に目障りなもんですから、明治維新後は、天皇中心の政治をしいて、仏教弾圧、宗教弾圧をするわけですね。その一番大きいのが、皆さんのお手元に行っている、この中央教研の会議の資料のですね、十二頁のほうに、年表が入ってます。その年表の上から順番に、祭政一致とか神仏分離とか出てきますが、真ん中あたり、明治四年の社寺領上地令というのが出てます。これが、伝統教団の経済基盤を壊す弾圧なんですね。これによって、宗教教団は全部首に縄かけられたわけで、政府に従わないと領地取り上げるよという形でですね、今まで、江戸期まで、日

蓮法華宗という形で各門流が、それを総称して名乗っていたわけですが、これを強制的に日蓮宗という形に一個にまとめさせられるわけです。これが一番初めの日蓮宗、つまり弾圧によって出来上がったわけですね。ただ、この時の日蓮宗という法人組織は、四十四の本山が五山盟約ということで、歴史と伝統を背負った。つまり、日蓮宗といっても行政機関であって、宗教法人上の機関であって、住職の任免権等は本山が持ってたわけですね。本山の振る舞いの中で住職作ったり教師作ったりしていたわけで、それを日蓮宗が行政的に追認した形で日蓮宗だったわけです。そういう宗教的な弾圧がずっと七十年続いてですね、一番大きい問題は、昭和十五年に宗教団体法という法律が出来て、従わされるわけです。その時に、どんなことをしたかというと日蓮宗は、まず本末を解消して、伝統的なものを解消するんです、十五年の十月にです。そして、そのあと、宗綱審議会というのを開いて、戦時下に合ったように、思想統制に合うように、日蓮遺文を削ったりいじくったりして、十六年に、宗教法人日蓮宗として公認していただくわけです。つまり、宗教団体法に則る形で本末を解消して、歴史と伝統を捨てて、行政が宗教法人を認めてもらうために宗会を開いて、宗綱審議会でできた原案をたたいて、遺文削除をして、そして文部省に宗教法人日蓮宗として公認してもらうわけです。つまり、日蓮宗、宗教法人日蓮宗、行政機関が任免権を持ってですね、宗教法人日蓮宗がご遺文を削った。そして、国に宗教団体として認めてもらったわけで、つまり、その時の日蓮宗は、遺文を捨てた、つまり、布教教化を捨てた、ということですね。信仰団体、宗教団体としての行いを止めてしまった時点が、この昭和十五年、特に十六年の、宗教団体法に則る形で日蓮宗が公認されたということなんです。この一連の流れの中で、今日、これからパネル討論会で皆さんにお話する中で、全体のバックボーンはこれなんですよ。宗門としては、宗教法人日蓮宗、行政機関として認知してもらうために、宗教団体としての布教教化活動を止めてしまったのがこの時代なんですね、宗制を変えて。ここを切り口にしてこのパネル討論会を見ていただくと、全体が見えてくるんではないかなと思うんです。

灘上師　ありがとうございました。昭和十五年あたりのですね、その時代の日蓮宗ということで、布教教化を捨てた日蓮宗ということがポイントということで、ありがとうございました。続きまして、石川上人は、第三分科会で「国家と宗教―戦争のない社会を作れますか」というテーマでご発言の予定ですが、ご自分の戦争体験を通して、具体的なお話、またその当時ですね、戦時下における日蓮宗門の状況というのをお話いただけるかと思うんですが。

石川師　今日のパネラーの中では、私だけが戦争体験をしていると言いますか、まだ小学生でしたけれども、当時は国民学校と言っておりましたが、私は四年生でしたので、昭和二十年に。そんなことで、その当時のことについて話をしろと、こういうことでございますが、今、影山師が説明された通りですね、戦時中の、何も日蓮宗ばかりではありませんけれども、少なくとも布教教化を忘れたような状況にされてしまったというようなお話がありましたが、その戦時中に日蓮宗はどういうようなことで国策に従っていったのかということがあるわけですね。先程の映像でご覧になったように、日本全体がああいう状態になって、今の北朝鮮を見るような感じもした場面もありましたが、少なくとも、いいも悪いもないような状況の中で、日蓮宗も国策に従ってしまわざるを得なかったと。中には、仕方なく従ってたというよりも、積極的に加担した部分もあるんじゃなかろうかとこういう風に思うわけなんです。私は幼かったから宗門の動きなんて分かりませんけれども、記録によりますと、例えば金属回収令なんていうのが昭和十六年に起こっているわけですね。太平洋戦争が始まったのが昭和十六年の十二月八日ですが、その前後ぐらいに宗門から、国の命令によってお寺さんは、崇拝の対象になるものは別として金属類を供出しなさいというのがありまして、それこそ蝋燭立てもお線香立ても、金属のものはみんな供出をさせられた。特に梵鐘というのは大きなものでありますから、これを供出するということが、一斉に行われまして、積極的に、お国のために、ということで供出をしたというのもありますけれども、もうこれが我がお寺の梵鐘の最後だと言うんで、告別式をあげたというお寺さんもあったようであります。平和の祈りを音によって告げる、人々の心に平安を告げる、仏心を起こさせるその梵鐘が、軍艦

になり鉄砲玉になり人を殺す武器になっていったというそのことに、宗門が加担をしてしまったということは、非常に残念なことだとこういう風にも思うわけですが、当時は、やむを得なかったという言い方もあるかも知れませんが、少なくとも、先程の説明にもありましたように、お釈迦様の教えを頂くという上においては、人の命を奪うようなことに加担してはならないということを考えますと、非常に残念なことが起こったものだと。先程も言いましたように私は小学校四年生でしたが、戦争の悲惨さというのは、先程の映像で東京の空襲とかありましたけれども、もうまさに、悲惨で酷くて、よく命長らえたなと私自身思いますけれども、大変なもんです。これはもう、その、逃げ惑う中でですね、どこもかもが火事ですから。私は横浜で生まれ育ちましたが、横浜が五月二十九日に大空襲に遭いました。それまでに東京がやられ、それから大阪、神戸、名古屋、あらゆる大都市がやられてきて、一般の市民を皆殺しにするという、絨毯爆撃というB二九の爆撃によって、どこもかもが灰燼になっていくわけです。その中で国は、相変わらず、一億玉砕だとか、竹槍をもたせて原子爆弾に対するようなことを教えて真剣にそれをやっておったという中で、空からの攻撃には防空壕を掘って逃れることができるというんで、防空壕を掘る場所がない人は、畳を上げて縁の下に掘って、その中に、空襲の時はみんな逃げ込んだんです。そこへ逃げ込んだ人達は防空壕が墓場になって、火葬場になって、蒸し焼きになって死んでいったのを私はこの目でたくさん見てまいりました。それはもう本当に、断末魔の声をあげて、火だるまになって逃げ惑って死んでいく姿をたくさん見てまいりました。幼心にも、戦争のむごさというものを心底味わいまして、六十年経った今でも、昨日のごとくに思い出されます。戦争というものは二度とあってはならないという気持ちというものは、大部分の人はお持ちだと思いますが、かろうじて私もそういう体験を持っておるというのでお伝えをしておきたいと、こう思うわけであります。その戦争が、八月十五日、原子爆弾によって、三十万からの人が一度に命を奪われて、ようやく目が覚めて、日本は無条件降伏をした後、日蓮宗はいち早く戦争中宗門がやっておったことは間違っておったんだと、こういって反省を致しまして、その当時の総長、その当

時は総監といっておりましたが、その総監の言葉にも、或いは教学部長でいらっしゃった方も色々とその時のことを言っております。どのように言っておるかというと、まず戦争への加担について反省し、宗祖のみ教えをもう一度思い起こす必要があると。教学部長さんでしたが、宗門は戦時中、本宗の独特の気迫と信念を忘れて、国家迎合の色彩を濃厚にしてきた、日蓮聖人の立正安国の真意を没却して祖訓を断章し、都合のよい所だけを取り上げて国家に忠誠を尽くしてきた、宗祖日蓮聖人をたてるように見えて実は祖師に最も不忠なる集団となってしまっていた、宗祖の宗教は、日本にばかり都合のよい宗教では断じてない、大聖人の立正安国、日本の柱は、決して民族主義を基本にした国家的宗教でもなければ独善的な日本国体の礼賛でもなんでもない、払拭すべきは、時代的環境の中に没却して国家権力に追随し、時代を洞察することを忘れていたことであると。そしてその後、昭和二十三年に、西川景文さんという方が総監になられた時には、敗戦は反省・懺悔の好機である、この戦争は負けるべくして負けたのだ、本宗は国家に隷属し無力化され、国家に盲目的に追随し、社会民衆に向かう布教でなければならないのにそれを忘れていた、もう一度弘教の三軌を根本的に学ぶ必要がある、その使命に恥じることをまずもって懺悔という形で表さなければならない、一度でも宗門の誰かが戦争遂行を阻止しただろうか、誰もいなかった、自分を含めてまさに八寒八熱の苦しみを一時に受けるが如き思いを致しておると。法華経は六根の懺悔を説いて結経としている、罪の自覚なき所には神仏は現れない、布教もない、懺悔の心なき所には神仏は現れぬ、徹底的な懺悔が必要である、万事それから始まるのだと。こういうことを、当時の宗報から読み取ることができます。そこから立正安国平和運動に繋がっていくのでありますが、その世界立正平和運動は、今は休眠状態であります。宗制に規定はございますけれども、そういう状況になっております。果たして本宗は、このような状況でいいのだろうかというのが私の提案でございます。同時に、他の宗派では、もう十年前に浄土真宗では宗会でもって、如何なる国策によって戦争状態になろうと、それに宗門はノーと決議をしたということも聞いております。そういったことを考えます時、我々は、立正安国を標榜に抱えて、

毎年千鳥が淵で慰霊法要も行っておりますが、そういった祈りを行動に移すべき時ではなかろうかと、そういう風に考えております。

灘上師　ありがとうございました。積極的に国策に協力していった日蓮宗ということのお話と、あとはご自分の体験を通しまして、戦争の悲惨さ、二度と人の命を奪うことに加担してはならないという、ほんとに熱い思いというか正直な気持ちをお話いただきました。それと同時にですね、戦争に反対した日蓮宗僧侶はいたのかということで、反省が必要ではないかというご発言も、心に残りました。それでは、続きまして、早坂上人におかれましては、第一分科会におかれまして「皇道仏教問題から学ぶもの」というテーマでご発言を予定されておりますけれども、日本が戦争をしたその当時の状況というものは、日本はどのような状況にあったのかということを、社会的な部分を通しましてお話いただければと思うんですが。

早坂師　はい。その前に、私は、先程お話されました石川浩徳上人に比べますとだいぶ世代が下がります。しかしながら、戦争の悲惨な気持ちは同じであります。この位牌を持ってまいりましたが、これは私の伯父でございまして満州へ行って戦死しました興和院殉国日金居士。皆さんもご存知、それらしい字ですね。必ず下に居士がつきます。この伯父にも聞いていただきたいという思いで、お話したいと思います。私の家も二人戦死しましたし、大阪にある母方の家も、大きな家だったんですが焼かれました。ですから、戦争におけるところの心の痛みということにおいては同じです。しかしながら、この大東亜戦争、そして、明治維新からきた、あの日本の起こした戦争が、ほんとに罪悪の戦争であったのか、侵略戦争であったのかということは、私はもう一回検討の余地があると思っている立場でございます。まず当時の情況ですが、アメリカとですね、満州の利権をもって対立致しました、日本は。しかしその当時、日本は何も、アメリカに敵対意識を持っておりませんでした。しかしながら、アメリカは強硬な軍縮策を持ってきます。或いは、いわゆる在日アメリカ人ですね、日本の移民を強制的に閉め出します。そして、ＡＢＣＤ包囲網、

アメリカ、イギリス、オランダ、中国、このＡＢＣＤ包囲網によって、経済封鎖を致します。そして、石油輸出を全面的に、その当時日本はアメリカに多く石油を依存しておりましたけれども、全面的に禁止します。また、綿、羊毛、それから錫、ゴム等もですね、輸入できない、そういう状況に追い込まれたのです。これは、ルーズベルトが仕組んだ戦争であるということを、学者が証明しています。そして、これはやむを得ず出掛けた戦争、そして、アジア・東南アジアを独立させるための戦争であったと見るべきだと思っております。日本が侵略戦争であったという裁判をした東京裁判、この裁判については、インドのパール判事の『日本無罪論』という本が出ております。講談社から出ておりますが、この中に、ハルノートのような最後通牒をつきつければ、モナコ、ルクセンブルクのような小国でも、死を賭けて立ち上がったであろう、こう述べています。また、日本を統治したマッカーサーも米国に帰ったあと、日本が置かれたような状況になれば、日本が戦ったようにアメリカも戦ったであろう、日本には二つの選択肢しかなかった、戦争をせずに石油備蓄が底を尽くのをそのまま見過ごして他国の情けにすがるだけの身分の国に甘んじるのか、或いは戦うだけなんだ、生存のための権利が侵されれば、生存のための権利が侵されたならばどんな国でも戦うでありましょうと、そういう風に言っています。またその当時東京裁判に関わったオランダのレーリック、フランスのベルナール、それからウエップ裁判長、キーナン検事は、あの東京裁判は行き過ぎであったとそういう風に述べています。これは、解釈によってはうがった見方かも知れませんが、白人は常に有色人種を差別したのです。松岡洋右が国連を脱退したのは、人類平等、人種平等を説いたんです。その時過半数に達していたんだけれども、アメリカとイギリスだけが、こういう裁決は参加国一致でなければできないと言って、有色人種を差別したのであります。そして、不幸な戦争悲しい戦争であることには間違いないけれども、実はそういう意味があった戦争であったということだけ、そういう状況だからやむを得ず行った、要するに他国から打ちかけられた火の粉を国家一丸となって払い除けるための戦争であったということだけを申し上げたいと思います。

灘上師　どうもありがとうございました。今のお話で、戦争は致し方ないことであったという、そういう状況があったということと、伯父様が戦死なされているというお話で、非常に熱い思いを語っていただきました。それではここで、参加者の皆様に、アナライザーを使いまして少しアンケートを採らさせていただきたいと思います。まず最初に、先程所員さんからもご説明がありました通り、スイッチをオフにしていただけますでしょうか。それでこれから申し上げます内容につきまして、スイッチを押していただきたいと思います。まずアンケートの内容を申し上げます。ご遺文削除、それから曼荼羅本尊不敬事件ですね、これがあったという、歴史的な事実があったということをこの中央教研に参加される前、ご存知であったかどうか、知っていたという方、スイッチを入れてください。はい、六八％の方が知っていたということですね。やっぱり全国からお集まりになってくる方ですから。あともう一つ、お伺いしたいと思います。戦争に加担してしまった日蓮宗について、やむを得なかった。まずこれが一つですね。それは、それから、戦争に加担してしまったことは間違いだった。それから三番目、戦争に加担したことは、間違いとも、どちらとも言えない。この三つで採りたいと思います。まず、戦争に加担してしまった日蓮宗につきまして、やむを得なかったのではないかと思う方。すみません、まず、スイッチをオフにしてください。それで、やむを得なかったと思う方、スイッチをオンにお願い致します。三七％ですね。それではスイッチをオフにお願い致します。続きまして、戦争に加担してしまった日蓮宗が間違いだった、と思う方、スイッチをオンにお願い致します。五三％。戦争に加担してしまった日蓮宗について、いいとも悪いとも現状では言えないなあ、どちらとも言えないという方。皆さんスイッチをまずオフにしてください、すいません。どちらとも言えないという方、スイッチをオンに入れてください。一九％。足すと百％超えますかね。まああの、そういう形で、やむを得なかったが三七％、間違いだった五三％、どちらとも言えない方が一九％ということで、ちょっとこう、少な目に考えれば間違いだったという方が半数いらっしゃるということで、今アンケート結果が出ました。参加者の六八％が、ご遺文削除、お曼荼羅本尊不敬事件

等ご存知であって、間違いだったのではないかという方が半数いらっしゃいますけれども、このアンケート結果を見てですね、アドバイザーである伊藤主任さん、どのようなご感想をお持ちでしょうか。

伊藤主任　前もって配った資料、年表の十九頁に、昭和九年十一月十日のこととして、日蓮聖人遺文削除問題起こると、いう項目があります、年表の十九頁の真ん中です。『昭和新修日蓮聖人遺文全集』の遺文に不敬字句があるとし、内務省が削除を命じると、これが遺文削除事件ですね。これは昭和九年ですが、ずっとそれから、昭和十五、六年、最終十七年まで、日蓮宗はこれに振り回されて、最後に教学刷新と新体制にまで持っていかれます。新体制というのは、宗教団体法で強制的に三派合同させられたあとのことですけれども、なんと八年間も引っ張られてしまう。『縮刷遺文』の絶版とか二百何箇所の遺文削除とか出てくるんですが、それでもまだ不足だと言って、内務省からはもっと直せを言われるわけですね、これが遺文削除事件。このあと、年表で二十頁ですが、下のほうですけれども、昭和十二年に兵庫県神職会会長徳重三郎が、曼荼羅中の天照八幡勧請を不敬とし、神戸地検に告訴するという、この告訴は却下されましたけれども、これがぐーっと社会的な問題になっていくわけですね。日蓮宗というのは、曼荼羅のお題目の足元に、天照大神・八幡大菩薩を踏みつけにしてると、こういう言いがかりです。それでさっきの問題提起、最初の基調報告で申し上げた、特高資料の曼荼羅の図が出てくるわけですね、足元にありますね。大変苦労して法華宗は応じていくんですが、法華宗はこの件につきまして、昭和十六年でしたか検挙拘束されて、敗戦になるまで投獄されるわけですね。結局、審議未了で終わるわけですけれども、法華宗は抵抗して、ここは譲れないと言って国難、法難、或いは、公場対決といって対応しました。本宗はなにも抵抗せずに、受け入れました。このへんのところを皆さんどう受け止めるか、この前提には明治からのことがありますが、特に日蓮宗は、今日配った六頁の資料の年表の所ですけれども、明治四十四年に天皇本尊論が出てきて、大正期に奉献本尊が出てきて、大正天皇にお祝いでお曼荼羅を贈るんですね。これが奉献本尊ですが、そして立正大師号をいただくようにお願いをする、もらったあと今

度は額に書いていただくということを昭和六年にお願いする勅額降賜。ぐっと、行政、政治、体制に寄っていくんですね。こういう状況で遺文削除を言われて、曼荼羅を不敬と言われて抵抗しなかったのはよく分かると思いますが、しなくてよかったんでしょうか。どうでしょうか。それを考えていただきたいと思います。次に、皇道仏教が、昭和三年の宗報の中で出てまいります。各宗の中では、早く出てきます。日蓮宗が一番早く、天皇本尊と言いますか、言葉上も対策上も皇道仏教化していったと言えるかも知れません。皆さんがどうお考えになるか、アドバイスさせていただきます。

灘上師　ありがとうございました。このアンケートの、戦争に加担してしまった日蓮宗が間違いだったという方が半数くらいいらっしゃるんですが、この辺の皆さんの、参加者の今の現状、状態はどういう風にお感じになられますか。

伊藤主任　一〇〇％を超えておりますので、不正確ですからお答えできないと思って、黙っておりました。

灘上師　でも、割り引いて、ということで、敢えて現状を。

伊藤主任　まあ常識的なところかなあと思って、ありがとうございます。

灘上師　はい、ありがとうございます。それでは、そういうことで、ご遺文削除等ですね、戦時下において日蓮宗がいろんなこう、現状として、歴史として、そういうことをしたんですけども、影山上人は、そのことについてですね、その戦時下における日蓮宗の行いというものに対して、どのようなお考えでいらっしゃいますでしょうか。

影山師　戦時下の問題は、あくまでも行政的なところで行われていたと思うんですね。例えば私の師匠は今九十五歳で奥さんが九十歳になりますが、ちょうどその時代の人ですので、お曼荼羅の問題ですとかご遺文の問題とか日蓮宗から公的に各寺院に連絡があったんですか、ということを聞いたことがあるんですが、師匠は、その時分、昭和十五年くらいは、立正大学大学院あたりに残っていたようでしてね、体調を崩して自坊へ帰った。ですから、中央でそ

ういう問題があったということについては、知っていたようなんですが、師匠の話からいけば、公的な文書で日蓮宗から行政的にこうしろということは一言もなかったということなんで、行政が余りにも自分達のサイドでいろんなことをですね、つじつま合わせをやっていたように思うんですね。ですからその辺のことをやっぱり、しっかりと考えておかないと、宗教団体の日蓮宗なのか、行政組織の日蓮宗なのか、というようなところへ引っ掛かってくると私は思うんです。

灘上師　それについてちょっと。日蓮宗の行政と、一般教師、一般のお僧侶方との間はすごく距離感があったということ？

影山師　と、思うんですけどね。昭和十五年以前の日蓮宗の在り方というのは、本末関係がありましたから、本山が任免権を持って行っていたことに対して、行政機関の日蓮宗がそれを追認する形だったわけですが、十五年のこの宗教団体法に見合った形で十六年に、新制日蓮宗になった時には、そういうその本末関係を自分達が解消してですね、そして、宗教団体法に則る形で宗教法人日蓮宗を認めてもらったということなんですね。それには、本山会を何回か開いて、昭和十五年の十月に解消というのを、行政的なサイドで決めているわけです。先程、石川上人がですね、昭和二十二年の、この日蓮宗の反省のことを宗報から拾ってお話になってましたけれども、その宗報で反省をしている方々が、実は、本末解消をしてですね、行政日蓮宗をずっと動かしてきたわけですよね。つまりその、日蓮宗という在り方が、その辺からもう、十五年以降違ってきているってことなんですよ。その在り方を考えておかないと、うまく、こういった話、噛み合わないように思うんですけれども。

灘上師　その辺のこう、本末関係から行政へという移り変わりがポイントだということですね。

影山師　そうです。行政機関が任免権を持ったのは、十六年からの法人の在り方ですから、ですから、伝統とか歴史とかいうものを度外視して、行政機関として何でもできた、ということですね。

灘上師　はい、ありがとうございます。それでは同じ質問なんですけれども、石川上人にお伺いしたいんですが、やはりこう戦時下で、先程もご自分の体験を通してお話いただきましたが、戦時下における日蓮宗の行いということで、ご意見をいただければと思うんですが。

石川師　戦後、いち早く日蓮宗は、宗門のいわば指導者の立場におられる方が、懺悔する、反省する、そして反省しろ、懺悔せよ、こういうことで言ってるわけです。ということは、戦中のことが間違っておったんだという自分達の行動について、おおいに自ら反省をされて、その上で宗門全体にそうした宗報を通しておっしゃったんだろうと、私は思ってるわけですね。ただその、早坂さんの話によると、あの戦争は日本が追い詰められてアメリカのルーズベルトにしてやられたんだと、こういうようなお話もありましたが、一般的には、国家という、そういう立場においては、そうした考え方もあるかも知れませんが、少なくとも、私共は仏教者である。命を大切にしろ、殺すなかれという仏陀の教え、そして日蓮聖人の教えをいただくものとしては、やはり、あの戦争について肯定をしてはならないと私は思うんです。そうしなければ、戦後のその宗門の為政者の反省もですね、本当に、それが身になってきておるというわけにはいかなくなってしまうんではないかなと。戦中にはですね、お坊さんが、衣の代わりに軍服を着て、数珠の代わりに鉄砲を持って、そしてお経を読む代わりに天皇陛下万歳と言って戦地に行った人も結構いるわけです。実際に、そうして亡くなった人もおられます。同時に宗門は、従軍僧という、要するに戦地へお坊さんを派遣して、宗名においてそうしたことに加担をするように仕向けていったということもあるわけなんです。昭和五十一年に、五十二年でしたかな、戦中に、従軍僧であった方々を宗務院に集めまして、その当時のいろんな体験談を語ってもらうという懇談会がありました。私は当時、宗務院で伝道部の課長をしておりまして、知っておりますけれども、従軍僧が全員が集まったわけではありませんが、約十名ほど集まりました。その中には、いろんな方がおられたわけですけれども、当時のことを回顧して、『宗門新報』という宗内の新聞がありますが、そちらのほうで連載をされた方が石

川泰山さんという方がおられまして、その方が、生々しい報告を寄せております。その時の状況から考えましても、坊さんがこんなことやってもいいんだろうかと、本当に。軍隊に従って、自分達は僧侶という立場だと言うけれども、剣でもって人の命を奪って、その生々しい様子を、体験談として連載しておりましたが、やむを得なかったというようなことで済ますことはできない。それを戦後になって石川さんは、反省をされながら体験談を語っておるんですが、やはりそのことに思いを致す時、坊さんは命を大切にしろと人にも教えておるわけですからね。そうした戦争が起こるような状況がもし起きるようなことがあるならば、それを、先頭に立って反対をし、そのことについて声を大にして行動をしていかなきゃいけないんじゃないか、という風に私は思っております。

灘上師　ありがとうございます。従軍僧として行かれた方も戦後反省をされて、そういうようなことが必要ではないかということなんですけれども、先程の伊藤主任からの基調報告の中で、法華宗のお話がちらっと出ましたけれども、その辺の補足というか、いただければと思うんですが。

石川師　伊藤主任さんからもちょっと説明がありましたが、当時、戦争に反対というのではなくて、日蓮聖人のご遺文を削除したり、或いはお曼荼羅不敬事件と申しまして、お曼荼羅の中に、天照大神八幡大菩薩という形で、小さく下のほうに書かれてあるということはこれは不敬であるというようなことで、官憲から大変な酷い目に遭った方がおられました。日蓮宗が三派合同した、その昭和十六年にですね、身延山に約百名の三派合同した後の主な方を集めまして、ご遺文の中で不敬に当たる所はどこだろうかというので、宗綱審議会というのがありましてね、そこで検討した結果、二〇八箇所が不敬に当たるんじゃないかというので、そこのところを削除して文部省へ持って行ったところが、文部省のほうからこれではまだ足らんと突っ返されたというようなことが、記録されています。法華宗の方で、天照大神八幡大菩薩は小神ぞかしという文言が書かれてある法華宗の本に対して不敬事件ということが起こったんですが、法華宗宗務総監、或いは教学部長、そして幹部六名が検挙をされて、引っ張っていかれたと。その方々の

お名前が、三吉日照さんとか、松井正純さんとか、刈谷日任さん、泉智宣さん、株橋諦秀さん、小笠原日堂さん、こういう方々が、実際、この学林の教授であったり、或いは総監であったりという方々ですが、しょっぴかれて、大変な思いをされたという事実がございました。それと同時に、『縮刷遺文』の絶版を日蓮宗はさせられました。絶版させられたというよりも、自ら、もうこれは販売しないでおこうと、これはもうなくなったことにしようと、絶版にしてしまったと。そしてご遺文を削除した、要するに不敬に当たるような文字を削除したご遺文集の編纂をやってる最中に戦争が終わったということが、そういう事実がありましたね。

灘上師　ありがとうございました。補足ということで、一応そういうことでお話をいただきました。続きまして、早坂上人、同じ質問になりますけれども、戦時下における日蓮宗の行いをどのように。

早坂師　はい。先程のお話を一面的に聞くと、或いは心情左翼の皆さんからは、凶悪な戦争容認者、或いは戦争を美化しておる人間のような誤解を招いたかも知れませんが、私は決してそんな考えではございません。先にご遺文削除と曼荼羅不敬事件、これは私達の日蓮聖人・日蓮宗先師の教義に関わる問題ですから、いくら米英から振りかけられた火の粉を国家一丸となって振り落とさなきゃいけないという考え方に立っていたとしてもですね、あれは抵抗すべきであったと。このことについては絶対に私は懺悔しなきゃいけないと、そういう風に思っています。ただ当時の情況では、教団が潰される、行政なのか宗教教団なのかという問いかけが影山上人からありましたけれども、確かに難しい状態でしたね。殺されるかも知れない状況ですから。今の、自由な身でこういう言いたいことが言える時代ではございませんので、そこは、その時代になった時の立場に立たないとちょっと言えないかな、と思います。それから、日本人は農耕民族です。春に種を植えて、夏に実がなって秋に刈って、この春夏秋冬という循環、要するに因果応報ということが如実に語れる国です。しかしながら、大陸はそうではないのです。狩猟民族です。狩猟民族というのは、知恵を使って動物を殺して生計を立てます。知恵を使って掠奪していかなきゃいけない、これが生きる常識な

んです。キリスト教を中心とする宗教は、イエスの磔から始まる。仏教は、お釈迦さんの自然死です。そしてこの仏教の思想と日本の神道が結び付いて、大きく開花したのが、私達の日蓮法華宗教ですね。そのことを踏まえていくと、戦争というのは、社会的常識から言うと武力を用いた政治的行為です。勿論戦争をしないほうがいいに違いないです。また、平和というのは、世界の常識では、勝ち取ること、戦うことなんです。日本は素晴らしい国です。因果応報を体験できる国です。だから、そういう平和論がぶてます。しかし、日本の常識は世界の非常識、世界の常識は日本の非常識。このことをまず知って欲しいということです。そういうことを知っておったら、ルーズベルトの戦略に嵌められることはなかった、また、ルーズベルトはスターリンの戦略に実は嵌められてたんですよね。これは話すと長くなるからやめますけれども、そういうことを踏まえると、軽々にですね、平和論、或いは戦争論を論じるべきではない。戦争論の著者、ちょっと今、出てこないんですが、戦争というのは、ドンパチすることだけが戦争ではございません。一に、思想戦争、それから外交戦争、経済戦争、貿易戦争、様々ございます。現在も実は、平和時なようであって、実は戦闘状態であるということを、まず知ることです。そして、マスコミ等における思想は、その思想戦略は何なのかという中身を、まず見ることから始めていただきたいと思います。お坊さんだから、当然です。不殺生戒ですからそんなことしないほうがいいに違いない、しかし他国はそうではないんです。侵略が当たり前、戦争が当たり前というのが、他国の常識です。心情的な倫理論ばかりをぶつところに、日本国の甘さがあると思います。もし言うなら責任倫理であって、この国をまず如何に守るかというところから、勿論、如何に守るからと言って、国防を充実して、他国と戦争をするなんてことは毛頭いけませんから、そこは、法華精神で私達は教化していくということですね。基本線はここであろうと思っています。

灘上師　ありがとうございます。石川上人どうぞ。

石川師　あの戦争は、そういうような状況でやむを得なかったというね、そういう考え方でおっしゃってるんだろ

うと思うんですが、やはり我々がね、一番根本においておかなければいけないことは、仏教者であるという、そこから発言をしていかなきゃ私はおかしいんじゃないかなと思うわけですよ。戦争というのは自然現象ではありません、人が起こすんですよね。考え方の違いということで衝突が起こって時には武力を使うというのはあるかも知れませんが、少なくともそういう武力でもってね、例えば最近、小泉首相がよく言う、国民を守る、国民の財産を守ると、そんなことをすぐ言うわけですけれども、守れた試しがないんです、戦争は。さきほどの映像で見た通りなんです。あの通りのね、自尊自衛とかね、この国を守るために、まずこの国という考え方があの当時はちょっと変わっておりましたがね、国体というものが。けれども、少なくとも国民の命の安全だとか、或いは財産を守るためといって戦って、ああいう酷い目に遭って、日本では何百万人が亡くなり、世界では三千万の人が亡くなったんですよ。我々はそれにノーと言わなきゃならない立場なんだと、そういうことを考えた時に、戦争ややむを得ないんだと、平和も勝ち取るんだと、こういうようなことで武器を使えば、力で抑え込むことは力で負けたりする、その時には必ず両者が酷い目に遭うんです。その両者というのは、実際に武器を持って戦ってる人間よりも、そうでない、まったく無辜の人達が酷い目に遭っておるというのが実情であり、これからも、もし戦争が起こったならば、そういう結果になるだろうと私は思いますね。

灘上師　ありがとうございました。ちょっと、早坂上人のほうに確認なんですけれども、先程のご遺文削除並びにお曼荼羅の改変というか、その辺のところは当然してはいけないことだけれども、戦時下においては致し方なかったというようなご発言でよろしいですか。

早坂師　法華宗の方が抵抗してますよね。あれ見ると、やっぱり、致し方ないという部分もないわけではないですけども、抵抗すべきであったという気持ちもあります。しかし私がその場にあったら、抵抗できたという保証はないですから、そういう意味ですね。

灘上師　そういう意味で、ということなんですね。それでは、ここで、参加者の皆様に、またアンケートをさせていただきたいと思います。お聞きしたいことはですね、ご遺文削除など、先程影山上人のお話にもありました、布教を捨てた日蓮宗、戦時下における日蓮宗というこの宗門状況におきまして、宗教者である私達を含めたですね、現在の日蓮宗が、戦時下における行いについて反省すべきかどうかを、アンケートを採りたいと思います。まず、アナライザーをオフにしてください。その行いに対して、現在我々は深く反省すべきと思う人、スイッチを入れてください、お願い致します。六六％の方が反省すべき、ということですね。そういうことで、六六％、まあ三分の二の方がそのように、反省すべきだというように、今現在お考えであるということです。戦時下においてですね、宗門は今から考えても心情的にはすべきではないけれどもそうしてしまった、ということなんですけども、どうして宗門が国策に反対できなかったのか、法華宗の方はそこは曲げなかったという先程の石川上人のお話がございましたけれども、どうして反対できなかったかというのは、今の我々の頭で考えて何か思い当たるということはありますでしょうか。影山上人、何かご意見あれば。

影山師　やっぱりですね、今、早坂さんがですね、先にお話しましたけども、政治家の発言と、行政を司る者の発言と、宗教者の発言とあると思うんですね、立場によって。宗教者は宗教的な情操において発言し、そのために宗教者と言われるわけですから、思想信条がどこにあるかということだと思うんですよ、まず。つまり、自分の信仰をどこに持っているかということだと思うんですね。そういう目で考えれば、あの十五、六年、宗教団体法の後、宗教法人日蓮宗として認証してもらうためにご遺文を削っちゃったわけですから、つまりそこで布教を捨てた、信仰を捨てた、宗教を捨てたということですね。宗綱審議会は、その当時の立正大学の先生方が殆どですから、学者はいたけれども宗教者・信仰者がいなかったということになるわけで、やっぱり、大事なことは、自身の宗教・思想信条を、一番大事なものを壊して、組織を残そうとしたということが問題だと思うんです。組織が壊されても、信仰が残ってい

ればよかったと思うんですね。その辺のことだと思うんですよ。つまり、信仰を捨てて、布教教化をやめて、行政的に宗教法人日蓮宗を残す作業をずっとやってたということ。戦後を振り返った時に、今現在から見ても、状況はやっぱり同じですから、その辺のことをしっかり見ておかないと、現在も理解できないと思うんですよ。今、憲法九条の問題がずいぶん表に上がってきてですね、宗教者としてどう思いますか、憲法第九条。これは憲法ですから政治家の本来考えることであって、宗教者は宗教的な、日蓮聖人がこうだからと、法華経がこうだからと、自身の信仰で語るべきが宗教者であると。ですから、この段階でですね、戦時下において、宗門は宗教を捨てた。そこが一番の問題だと、信仰を捨てたことが一番の問題だと、そういう風に思います。

灘上師　ありがとうございます。以前私がその僧侶になったばかりの時にですね、管区の研修会で、そういう、ご遺文削除並びにお曼荼羅の不敬事件のお話を聞いたことがございまして、その講師先生がおっしゃってたことで、日蓮宗は反省すべきだ、ということをおっしゃったんですね。そしたら参加者のご老僧が手を挙げまして、と言ってもその時代でこれをやったら日蓮宗は潰れていたんだ、我々はもう泣く泣くやったんだということをですね、ご発言されて、お坊さんになったばかりの時だったので、戦争っていうのは、色んなことがあったんだろうなという思いがありましたんですが、その教師の、お上人が仰っていた、潰れていたんだ、ということに関しまして、どうですかね。

影山師　そうですね。今、お話にあったように、戦時下の宗教団体は、殆ど、全ての教団と言ってもいいと思うんですが、皇道宗教で、戦争には加担していたんですね。ところが、潰された教団がいくつかあるんです。伊勢神宮のお札を貰わなかった教団が、いくつかあるんです。一番大きい例で言えば、大本教は幹部三千人が検挙されて、二十人近くが殺されているわけですね。その教団は、今、信徒十七万の教団になっています。それからひとのみち教団は、信徒百万あって潰されています。それも今、百二十万組織で、これは今のＰＬ教団です。それから創価学会の元の創価教育学会の初代会長牧口常三郎は、不敬罪、お札を受け取んないということと、会員に受け取るなと言ったこ

とでですね、思想信条、自分の信仰を守って投獄されて死んでます。ですから、反対しても、教団が潰されても、信仰が生きていれば、戦後ちゃんと復帰して、布教教化活動をしているわけです。ですから、今おっしゃられたことは、私は当たらないんではないかと。組織が潰されてもですね、信仰は残る。そうお考えになったほうが、僕はいいと思います。

灘上師　今例に挙げていただいた大本やＰＬ、学会ですね、その辺の状況というのは、宗教信条は曲げなかったけれども、国策に対しては、どういう状況。

影山師　皇道宗教として、戦争には加担してたんですね。戦争には加担していたけれども、最終的には、自己の思想信条は貫き通したということです。日蓮宗はある意味では思想信条を曲げてですね、国策に従ってですね、戦争に加担して、なおかつご遺文まで削ってですね、これ、宗教団体としてはおかしいですよ。やはり、布教教化をしていかなければ。団体がなくなっても。裏を返せば、法難にも遭わなかったんですね。まさしくこの段階で、本宗は一番大事なものを捨てた。ここはやっぱり、一回はきちっとけじめをつけないと。行政日蓮宗、ずーっと今も続いているわけですから。あの時はやっぱりこうだったと、それが、戦争に加担していった一番大きな、宗教家としての、宗教者としての見方とすれば、ここに落ち着くべきだと私は、思うんですけれどもね。

灘上師　ありがとうございます。何か、ご意見ありそうですね

早坂師　よろしいですか。あの、戦争というのは、政治的判断ですることですから、宗教者だから宗教者の解釈、考え方でいけるかということ、そうではないのがたくさんあります。それは先程も申しました、思想戦ですね。経済戦争、貿易戦争、外交戦争ございますので。だからこの問題は、永遠の課題になると思いますが、問題は、僧侶が、国家の命令で戦争に行かなきゃならない時、行っちゃった時ですね、そんなことはたぶん今後起きうる要素というのはかなりパーセンテージとしては少ないと思うんですが、当時のことを考えてみると、どういう風にこれ考えるかは

また、色々議論があると思います。この不殺生戒についても、日蓮聖人は、例えば、鏡忍坊や工藤吉隆が日蓮聖人をお守りするために命を棄てた小松原法難の時は、向かってきた人を殺してると思うんですね。でも日蓮聖人をお守りした。或いは、日蓮聖人が立正安国論で引用している有徳王・覚徳比丘ですが、有徳王はですね、覚徳比丘のために、命を棄ててですね、戦いを挑んで、有徳王は覚徳比丘をお守りしたということを引いてるんです。そうすると、この防衛論をどうするか、どういう風にこれから説明していくかというのは、私達宗教者の課題だと思います。

灘上師　どうぞ、影山上人。

影山師　今、その不殺生戒のことでですね、お話になりましたけれども、大事なことはですね、不殺生戒というのは律じゃありませんから、不殺生戒があるからと言って人を殺しちゃいけないという風に短絡には言えないんですね。不殺生戒を自分が保つ努力の中で、きちっと、宗教者の立場を作って、人を殺すなかれという言葉に意味があるんであって、宗教家としての自分は蚊帳の外に置いといて、宗教理論の上で、物を議論するってのはこれは宗教者の立場じゃないですね。自分が行った上で初めて説得力を持ち、宗教的に意味を持つわけで、行いのない、思想論としての思想信条だけのことは、これは宗教じゃないですね、信仰じゃないですよ。やはり発言するということは、宗教者が発言する、宗教者は何をもって宗教とするかということですよ。日常の中で何をもって生きるかと、論ずることではないと。やはり、我々であれば、日蓮聖人の教えに沿ってどう生きるかと、論ずるかではなく、生きるかということだと思います。ですから、戦時下にあっても、遺文を削ってしまったということは、行じってないわけで宗教ではないですね。

灘上師　はい、石川上人どうぞ。

石川師　ちょっと、まあ今の話は一応置いといてですね。日蓮宗は戦後、立正平和運動というのを盛んに行いました。これは戦後の、宗徒としての信仰運動ということで展開してきたわけです。その通りですね、やはり戦中のそう

したことを反省した上で発言してるんだろうと思いますが、我が宗門の立正平和運動は、決して、一時的な、そしてまた感傷的な叫びではないと。人類の、真の平和と幸福とを実現する唯一の鍵は、世界の全人類が仏性に目覚めることである。これを喚起するべく、叫び続けなければ駄目だと。久保田正文さんが当時、立正平和の先頭に立っておられまして、戦争は結局人と人とが殺し合うことである、人が他の人と殺し合わねばならぬことほど不幸なことはない、日蓮聖人の法華経実践の運動は当然の成り行きとして立正安国の実際運動である、ということで、立正平和運動の先頭に立っておられました。このことは非常に私は重いと思うんですよ。確かに、色々と、国の状況とかそういうようなこともあったかも知れませんが、我々は常に仏教者の立場で、こういった平和問題を考えていかなきゃならないんじゃないか。今、イラクのいろんな状況が起こっておりますが、そこに日本も自衛隊を派遣しております。そしてアメリカは、それこそ、沖縄の基地からどんどんと兵隊も送り、そしてまた武器も送っておるようなことがあるわけですが、六十年経っても、あの太平洋戦争のあの悲惨な状況がそのまま尾を引いて、沖縄の基地問題も解決していない。いろんな事を考え合わせますと、最近また、こうした憲法の改正問題とか、或いは憲法改正しないまでも拡大解釈をして、先だって、有事三法が成立してしまいました。有事三法というのは、国の行うことについて国民は協力をしなければならない、協力をしない場合には処罰されるというような法律です。昭和十三年に国家総動員法というのができましたが、それとよく似たようなものであります。段々そういう方向に日本を仕向けていきますと、これからは戦地に行くようなことはあんまりないでしょうなんていうような話がありましたが、そんなことはなくて、いよいよ危険が増してきたと、こういうように私は感じております。

灘上師　ありがとうございます。そういう状況において、先程、この中央教研が始まる前に、新聞のコピーで浄土真宗は国策に協力しないというような記事が配られてましたけども、その辺について補足があれば。

石川師　ここに、浄土真宗でですね、「戦争と僧侶」というパンフレットが宗内に配られたようであります。これ

はですね、浄土真宗では、当時、戦争に反対をした方々がおられました。ここに出ておるのは三名の方ですが、竹中英源さんという方と高木賢明さん、まあこの人は、大谷大学の学長もなさった方だそうですが、河野方運さん。その方々がですね、戦争に反対をしたというようなことで、どんな風な戦争の反対の言い方をしたかというと、たとえ権社の神、例せば天照大神また八幡神社のごときといえども、迹門の前には、輪廻の果報明快の有情なれば、言上の徒何の必要ありて、彼らに仕えんやと、こう言ってですね、言っただけで、もうこの人は、とにかく、最後は大変なことになってしまったわけですが、宗門も僧階剥奪をしたわけですが、この三人こそ本当の坊さんの鑑である、こう言って名誉を回復すると同時に、今後は、この方々と同様に、国家が戦争に向かっていくようなことがあった時には、真宗大谷派はノーと言おうと宗会で決議をされたのが、もう十年も前の話だと。最近では、他の宗派でも言うようになりました。臨済宗でも、そのような決議をしております。そのようなことを考え合わせますと、この浄土真宗のお坊さんのような人達が、やはり、これからは、いなければならないんじゃないかと、私は思うのであります。同時に、わだつみの会というのがありまして、そのわだつみの会で生前の家永三郎さんが出てこられました、あの方も当時学者ですね、むしろ私のような立場の人間が戦争反対すればよかったのにそれを言わなかった、今、改めて申し訳ないと、こう言って深々と頭を下げて、お話をされたことがありました。そういうようなことを考え合わせますとね、やはり、為政者、いわゆる行政なら行政の立場におられる方々が、先頭に立って、まずそれを言わなきゃならないんじゃないかな、という風に思うわけです。感想でございます。

灘上師　ありがとうございます。はい、それでは早坂上人。

早坂師　すいません。石川上人のお気持ちはよく分かります。しかしながら、それは日本全てが、日本悪玉論、或いは日本自虐意識に立つと、その方向だけに行くと思います。しかしながら現在、日本は他国に侵略されそうになっています。例えば尖閣諸島の問題。中国が日本の領海に入って、もう日本の石油を奪ってます。この既成事実を作る

と、そのまま、中国の思惑通りです。竹島問題、これもどう解決しますか。北方領土の問題。北方領土は、日本がもう、ポツダム宣言を受け入れて、もう戦争する意志がないなということを確認した、そういう弱い状況になった時、日ソ中立条約を破って、宣戦布告して北方領土を獲ったのです。そして、最近、ロシア政府筋は、当時、日本が侵略戦争をやったんだから正義の戦争だから、北方領土は返す必要がない、こういうことを言ってのけます。私は、戦争することは、大反対です。だから、国家が戦争を仕向けたら、それについては今頑張って反対したいと思いますが、同時に、再三申し上げますが思想戦、あの、或いは経済戦争、貿易戦争、全てを含めて戦争は考えるべきで、国家が、他国に攻められるという隙を見せない、国家体制を作っていくことが大事だと。その中で、法華精神の理念を植え付けることが肝要だと、こういう風に申し上げたいです。インターネットで、中国はですね、もう戦争しようとしているんですね。こういうのが出てきました、中国国防長官、台湾問題で日米を叩きつぶす。もう戦争をしかけてる。そういうことも、もう出てます。だから、中国共産党は、実はですね、中国国民、八千万人の人間を殺してるんですね。日本の軍隊が実は、中国を殺したんじゃないんです、あの戦争は元々台湾と日本との争いですからね。支那兵が、実は中国軍を殺してるんです。こういう状況はこれから正しく検証していかなきゃいけませんが、例えば仏陀は、マガタ国とコーサラ国の戦いの時、四度目の戦いを、三度諫めましたが、四度目は諫めませんでした。仏陀釈尊の力をもってすれば戦争をも防げたんでしょうけれども、因果の道理に従って、自分の釈迦国が亡びるのを、この目で、むしろ因果応報を、この地上サイドの人間に教えることが大事なんだ、或いは、因果の道理に釈迦といえど勝てない、とございます。そうすると、実は、この仏教の考え方では、ここは娑婆忍土です。娑婆忍土ということは、六道輪廻です。六道輪廻ということは、残念ながら、戦争は永遠に起こります。ならば、非武装であるだとか、何でも何でも戦争はいかんから反対する、中身も研究せずに反対すると、敵国の思想戦略の思惑通りです。もしここで、非武装とか、安逸な不戦の誓いをしちゃいますと、中国の思うつぼです。中国の属国になりたいですか。私は戦争を美

化するつもりもないし、戦争をしなさいと言ってるわけではないけれども、お釈迦様をもってしても、最後は、七不退法という教えを説いて、先輩の言うことを聞きなさい、故事に従いなさい、そして、自国を守る叡智を持ちなさいとして、七不退法を説きました。そして、宗祖大聖人も、自界叛逆・他国侵逼の難があって、蒙古が日本に攻めてくる、その時、法華経の精神をもって、この国を守りなさい。本化上行菩薩に仏陀釈尊の七不退法の教えが、この日本国に乗り移って、立正安国論として結実した、そういう教えだと思っています。以上です。

灘上師　ありがとうございます。影山上人。

影山師　よろしいでしょうか。宗教家が求めるものは何でしょうかということをまず第一に、考えていただきたいと思いますね。政治家が、宗教用語を使って喋ってるのと同じでですね、自身が、宗教者の立場に立って考えてないということですよ。先程からですね、私、日蓮宗、行政としての日蓮宗と言ってますけども、その日蓮宗の宗憲に書いてあることはですね、即身成仏、仏国土顕現という、これが理想ですよ。その、理想に向かって、宗教家は歩んで行くんであって、戦争から身を守るために教義を展開して話をしてる、これは宗教家じゃないですよ。やはり宗教家は、我が身に、そのことを当ててですね、私自身の、自分自身の生き方の中で、どう、この教えを布教教化していくかというところに、焦点があるわけで、早坂師の発言は、私は政治家の発言ならばそれで結構ですから、やはり、宗教家ならばそれは違うと、一言だけ申し上げておきます。

早坂師　いや、それはちょっと反論させてください。

灘上師　はい。

早坂師　じゃあ、お釈迦様の七不退法と立正安国論をどう解釈しますか。いやいや日蓮聖人の教えですよ。七不退法はお釈迦さんの遺言ですよ。解釈じゃなくて、七不退法はお釈迦さんの遺言です。立正安国論は日蓮聖人のみ教えですよ。私は戦争をしようなんて言っていない。この国に隙を作ると他国が攻めてくると、再三申し上げてるんで

す。

灘上師　まあ、ええ。

早坂師　まだいいですか。

灘上師　はいどうぞ。

早坂師　戦争はドンパチじゃないですよ、思想戦ですよ。それだけです。もうそれ以上は議論する必要はないと思います。

灘上師　あの…

早坂師　不殺生戒もならば、戦う前に相手が攻めてきた、相手が殺されるならやっぱりこっちは助けようとするでしょう。そういうことです。身内が殺されるようになった、そしたら必死に守ろうとするでしょう、それが不殺生戒の根底にあります。戦争は間違いなく政治解釈ですから、宗教家の宗教理念だけではもうこれは語れる範疇ではありません、以上です。

石川師　貴方のね、説は分かりますけどね、しかし、それはやっぱり坊さんの発言じゃないですね。特に日蓮聖人の…

早坂師　そういうのは宗教偽善論だと思います。

石川師　いやいや

早坂師　観念的かつ空想的平和論です。忍土娑婆は六道輪廻ですよ。

灘上師　あの発言は…

早坂師　倶舎論を説明してください。三界とは何ですか。

石川師　やっぱり仏教のね、我々が考えている…

早坂師　仏教仏教って、七不退法は何ですか。

石川師　この世の中をね…

灘上師　あのすいません、発言は…

石川師　仏様の国のようにしていきたいというのがね、最終的な理想じゃないですか。それに向かっていくのが僧侶なんですよ。力で力を押さえようなんて、無理なんです。それに向こうから攻めてきたらって、向こうから攻めてくるような原因を作らなきゃいいじゃないですか。だから少なくともね、今、日本…

早坂師　だから思想戦と申し上げました。

石川師　なぜ今、いろんなことで、隣の国や、その他の周辺諸国から色々なことを言われているかというと、やはりこれだけの軍備を備えれば、警戒されますよ。何にもなかったらね、誰も攻めてこないんです。はっきり言って戦後、どこが攻めてきましたか。誰も攻めてきません。むしろ逆に、ああ気の毒に、日本は無条件降伏して、武器を取り上げられて何もなくなった、気の毒だと。国民が困っているからと、食糧から何からみんな援助してくれましたよ。武器を持って戦う姿勢を見せれば、警戒をされるんです。そういうような、力で力を押さえつけようなんていう考え方そのものがね、だいたいが間違っておるんです、我々は仏教者ですから。先だって、中国で愛国無罪なんてことを言っておりましたけどね、愛国無罪なんていうね、国を守ろうというようなその考え方そのものが、国は守っていいんですよ、いいですけど少なくとも自分の国だけを可愛がるような、そういうような考え方というのは仏教者にはありません。

早坂師　その考え方が自分の国だけを可愛がってると申し上げたいです。思想戦ですから、

灘上師　様々な意見がございますけれども、お時間の都合もございます。やっと面白くなってきたんですが、時間があと五分ということですので、皆様に最後に、もう一つアンケートを採りたいと思います。よろしくお願い致しま

す。まずスイッチをオフにしてください。国策として、戦争が想定されるとしたら、仏教者として、戦争やむなしと、しますか。戦争をすることは、やむなしと思う、しても仕方がないなと思う人、宗教者としてですね、はい、スイッチをオンにしてください。九％ということで。まあ、九割以上の方が、戦争は如何なることがあっても反対だということですね。ちょっとうまい感じで、水が差せて良かったですね、このままどうなることかと。あと最後にですね、ちょっと現実的な部分でですね、戦争にならないようにするためには、どのような行動をすることが必要かと、僧侶の役目ということでお考えがあられる方、あとちょっともうお時間がだいぶ迫ってるんですが、ご発言いただければ。影山上人。

影山師　自分がそういう状況を作らないようにすることだと思うんですよ。どうも今、いろんな議論で噛み合わなくなってるのは、宗教者だと思っていながら、たとえば日蓮宗の僧侶になる状況を作ってもですね、僧侶になってるのかどうかということもあるんですよね。実際に自分が言ってることが、自分で行いの中でできてるかどうか。日蓮聖人の話はできるけれども、その日蓮聖人の教えを行ずるというか、宗教的に行っているか、その辺の分かれ道があると思うんですよね。戦争論になってしまうかですね、反対論になってしまうか。

早坂師　戦争なのか、じゃあ不殺生戒でやるべきだと思います。再三申し上げますが…

影山師　不殺生戒、戒は、律じゃありませんから自分がどう保つかという所に問題があるんですよ。

早坂師　じゃあ戒を捨てる時の議論をやりましょうよ、それなら。

影山師　え？

早坂師　こういう時は、仏教の教えの中に、いわゆる殺生戒に触れる時は、戒を捨て、証人がいるんですが捨戒をしてそれに準じなさいという教えがあるんです。だからこれは軽々にですね、不殺生戒だけを探ってですね、やって議論できるものではない。もう一回返します、七不退法というお釈迦さんの遺言がございますので。

影山師　まず…

早坂師　戦争を言うなら防衛ということも言わないと話になりません。

影山師　ですから宗教…

早坂師　日本の常識は世界の非常識、

影山師　宗教者…

早坂師　世界の常識は日本の非常識です。

灘上師　お時間もないようで、ちょっとこのへんの話は…

早坂師　農耕民族と遊牧民族、略奪民族の違いです。

石川師　あの、時間がないそうですが、最後にですね、今年も日蓮宗は千鳥が淵で戦死者の慰霊祭を行いました。仏教界では日蓮宗がいち早く、あの千鳥が淵で戦争犠牲者の霊にご回向をしてきております。今年も行いました。岩間総長は先程のご挨拶で、この重たい議題について、皆様方がいろいろとご討議をされて、ぜひとも素晴らしいご提案をいただきたいというようなご挨拶がありました。岩間総長も、立正平和運動という運動そのものについては、大変積極的に進めておられる方であります。その方が、日蓮宗新聞にも大きくそのことをおっしゃっておられまして、イラクに平和が訪れることが何よりも大切だと日蓮宗の声明として発表し、政府の対イラク政策に疑問を投げかけながら平和の祈りを広く呼びかけた。戦後の日蓮宗は、そうした戦中の反省の上に立って歩んで来て今日を迎えておると。その中で、二度と再び戦争はしてはならない、人が人を殺すようなことをしてはならないと言っておるということを、ひとつお心に留めて部会を行っていただきたいなと、思います。

灘上師　最後にまとめていただいてありがとうございます。お時間がきてしまいました。最後にアドバイザーの伊藤主任さん、今回のパネルを通してのご感想を手短にお願い致します。

伊藤主任　手短に申します。戦後六十年、まがりなりにも平和が続いておりますが、大正デモクラシーの後に十五年戦争が起こっております。ワイマール憲法、あの理想的な憲法の後にヒトラーが出ております。自身でものを考えないと、六十年の平和がどうなるか分かりません。それを考えます。私は、「平和と戦争」と発題しました。「戦争と平和」ではなくて、平和が先なんですね。仏教は、仏国土が娑婆即寂光で寂光土なわけです。その仏国土を汚してるのは人間ですから、仏国土顕現と日蓮宗宗憲にあるように、我々は、平和を考えるべきだと思います。争うことは考えるべきでないと思っております。この点を、三分科会で深めていただきたいと思います。よろしくお願いします。

灘上師　どうもありがとうございました。それではもう一度、先程一〇〇％を超えてしまったアンケートを採りたいと思いますのでお願い致します。戦争に加担してしまった日蓮宗について、やむを得なかった、間違いだった、どちらとも言えない、でお聞きします。まず、皆さんスイッチオフにしてください。加担してしまった日蓮宗について、やむを得なかったと思う方、スイッチを入れてください。三〇％。スイッチをオフにしてください。戦争に加担してしまった日蓮宗について、間違いだったと思う方、スイッチをオンに入れてください。五七％。スイッチをオフにしてください。どちらとも言えないと思う方、スイッチをオンにしてください。一一％。九八％ということです。先程と変わったのかな。やむを得なかった方が三七から三〇になりまして、間違いだったが五三から五七、どちらとも言えないが一九から一一ということで、どちらとも言えないという方が少し減っております。ありがとうございました。一時間半にわたりまして、パネルディスカッションを通しまして様々な問題をあげさせていただきました。パネラーの皆様のご意見、様々ございまして、これが参加者のお気持ちの代弁になっていれば、幸いでございます。これから皆様、分科会に分かれまして、もっと少人数でですね、ご討議いただきたいと思います。各分科会におけます皆様の活発なるご発言を期待しております。どうもありがとうございました。